

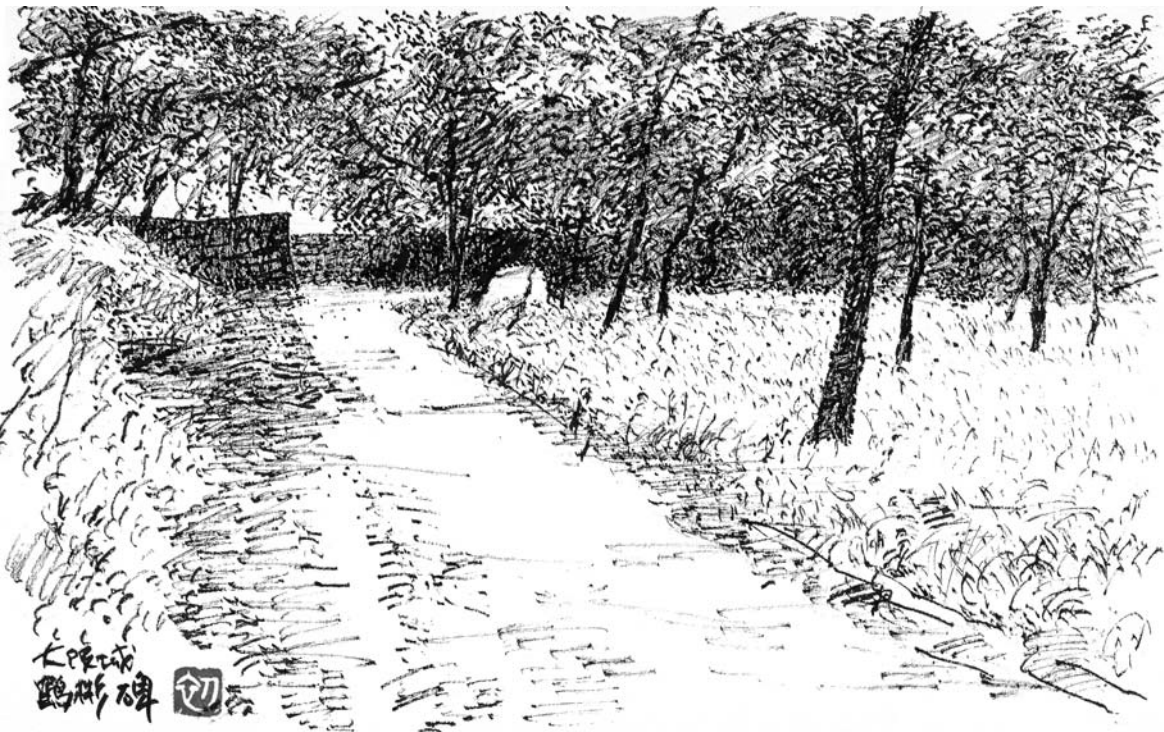
反戦川柳作家、鶴彬と大阪城

〈手と足をもいだ丸太にしてかへし〉——戦前に反戦を貫き29歳で獄死した川柳作家、鶴彬の生誕100年を記念した映画「鶴彬ころの軌跡」がいま全国で上映されている。「戦争へと向かう激流に立ちふさがる、若き詩人の魂 名匠 神山征二郎監督が万感の想いをこめて放つ、清冽な映像詩」(上映リーフ) そのままの作品だった。

鶴彬、本名喜多見(きたかつじ)。1909年石川県河北郡高松村(現かほく市)に生まれ、15歳から川柳を始め、17歳で大阪の町工場で働いた頃からプロレタリア川柳に傾倒。軍隊内での反戦活動で逮捕され陸軍の衛戍監獄に服役した2年間を除き、1937年12月、治安維持法違反で逮捕され、留置所で赤痢にかかり、翌1938年9月14日、29歳で亡くなるまでに1000句以上の川柳と90をこえる評論、自由詩などを書き記している。

「朝日」の天声人語は鶴彬の「その句は、軍や資本家の非人間性を突いてやまない。(胎内の動きを知るころ骨がつき)は、夫が戦死した身重の妻を詠んだ。(さん壕で読む妹を売る手紙)は、兄を兵隊に取られ、妹が身売りという農村の窮乏である。特高に生まれながら、怒りに燃えるように作り続けた」(6月7日)。

没後70年の命日、2008年9月14日に大阪城内豊国神社東隣の衛戍監獄跡に、有志の手によつて3本の百日紅とともに顕彰する銘石が建てられた。除幕式で元大阪城天守閣館長の渡辺武さんは「鶴彬が囚われていたのは、天守閣再建工事の最中だった」と説明した。その句は(鉄骨の伸びる打鉦の遠ひびき)なのだろう。作家の田辺聖子さんは冒頭の句を「鶴彬は『してかへし』と、かえした国家に対して、人民の怨嗟を七首のようにつきつけている。」という。暗黒の時代に歩もひかなかつた鶴彬に教えられることはあまりにも大きく重い。(N)



画／水会委員・日展会友 武藤 初雄
「大阪城内の衛戍監獄跡と鶴彬顕彰碑」